

『麻衣相法』について

On *Mayi Xiangfa* 麻衣相法

佐藤 実

大妻女子大学比較文化学部

Minoru Sato

Faculty of Comparative Culture, Otsuma Women's University

12 Sanban-cho, Chiyoda-ku, Tokyo, 102-8357 Japan

キーワード：人相術，麻衣相法，神相全編，人相編

Key words : Physiognomic theory, *Mayi xiangfa*, *Shenxiang quanbian*, *Renxiangbian*

抄録

本稿では『麻衣相法』の版本に関する2つの先行研究（梁偉賢「《麻衣相法》版本初探」『漢学研究』(34号, 2016)と三浦國雄『術数書の基礎的文獻学的研究—主要術数文献解題 第三篇』平成21年度～平成23年度科学研究費補助金(基盤研究(C))研究成果報告書, 2012)を整理検討したうえで、中国では散逸したと思われる『人相編』が日本に伝存すること、そしてその内容は梁氏が指摘する中国で最も古い『麻衣相法』の版本(全10巻, 万暦15年刊)の内容と類似することを指摘した。また、広く流布する5巻本『麻衣相法』に付された倪岳の序文に省略があることに注目し、その省略された内容を検討した。その結果、倪岳の序文は本来は『神相全編』に付されたものであり、5巻本『麻衣相法』の倪岳序は、『麻衣相法』の内容にフィットするように部分的に削除された可能性を提起した。

1. はじめに

中国をその淵源とする人相術(以下、相術と呼び、相術のマニュアルを相書と呼ぶ)の研究について、日本では『神相全編』がその代表的な著作として俎上にのぼせられてきた傾向がある。それは、江戸時代に本書が中国から日本に伝わり、石龍子こと藤原相明らが校訂し再編成した『神相全編正義』が江戸後期に刊刻され、広く流布したことがその一因であろう。現在でもこの『神相全編正義』は比較的容易に大学や公立の図書館で閲覧することができるし、またその綾装本がヤフオクに出品されることもある。『神相全編』はかように日本では売れた相書であった。

それに対して『麻衣相法』は全国漢籍データベースでも3件しかヒットせず、和刻本は内閣文庫蔵の安永7(1778)年刊のみ(2021年3月現在)、『神相全編』との流通量は雲泥の差である。

そうした中であって、三浦[2012]は相書について、『麻衣相法』『神相全編』そして『人相編』という明代以降に成ったと考えられる相書の版本につ

いて概括的な調査を行っており、貴重な報告書である。その後、梁[2016]によって『麻衣相法』の成立に関する考察がなされた。一つの仮説として今後、検討を加えていくべきものであると考えられる。

三浦[2012]は科学研究費の成果報告書という性格上、おそらく梁[2016]は参考にしていない。そこで、本稿では梁[2016]の概要を紹介し、三浦[2012]の調査結果と照らしあわせつつ、筆者の私見もまじえて『麻衣相法』について考えたいと思う。

2. 梁偉賢「『麻衣相法』版本初探」の概要

梁[2016]がまず注目するのが『金瓶梅』第29回の話柄である。そこでは道士が西門慶を占うシーンがあるのだが、道士はみずから「麻衣相法」に精通していると言う。道士をしてこう言わしめる『麻衣相法』は、数ある相書のなかで最も有名かつ高く評価されているのみならず、版本が多く、広く流通していて、重要な地位にある書である。

にもかかわらず、誰がいつ編纂したのかといったことなどまだ研究されていない、としてまず『漢書』芸文志、『隋書』経籍志などの図書目録における相書の著録状況が概観される。

宋代において相書は『宋史』芸文志に30種以上、鄭樵『通志』芸文略にいたっては73種が著録されていたのだが、『明史』芸文志になると一気に3種に激減する。

袁忠徹 古今鑑識 八卷
鮑栗之 麻衣相法 七卷
李廷湘 人相編 十二卷

の3書である。ここで梁[2016]が確認するのは『麻衣相法』はもとより、「麻衣」道者の名が冠せられた相書は『宋史』芸文志、『通志』にはまったく著録されていないこと、また宋代には成書したと考えられる相書『月波洞中記』『玉管照神局』にも麻衣にかかわる記述がないこと、逆に『麻衣相法』の名が他書に登場するのは『金瓶梅』もふくめて明代になってから成書した書物においてであるということである。

また程敏政の『篁墩文集』巻23に収められた「麻衣相法序」に「相人書有石室賦、金鎖賦、銀匙歌諸篇、相伝以為麻衣所著也。……吾友揚州同守鮑君栗之、以明經登上第而兼通諸家。以麻衣之書散出無統、集而刊之、凡他說之有涉於相人者、又取附之」とあることから、『麻衣相法』は麻衣道者が作った「石室神異賦」「金鎖賦」「銀匙歌」と他の説を合わせて成ったものであり、揚州の鮑栗之が『麻衣相法』を編纂したとする。

その鮑栗之については、程敏政の『篁墩文集』に収められた程の詩に登場することを指摘し、地方志などの情報とあわせて、鮑栗之は直隸壽州の人、鮑克寛であり、成化2(1466)年に程敏政と同年に科挙に合格し、戸部主事に除せられ、成化10(1474)年に揚州の通判、成化19(1483)年には同知に任ぜられた。程敏政『篁墩文集』は書かれた年代順に文書が配列されていて、「麻衣相法序」の前後に置かれた文書で、書かれた年が明記されているものはそれぞれ成化15(1479)年と18(1482)年であるからこの頃に「麻衣相法序」は書かれた。さらに成化15年と18年の間に9篇の文書があり「麻衣相法序」と成化18年の文書との間には1篇しか文書がないことから、大胆に推断するのであれば、成化17(1481)年から18年に「麻衣相法序」は書かれたのであり、『麻衣相法』じたいもそのころに

編纂されたと推察する。

以上の考証を踏まえて『麻衣相法』の諸版本とさらには『神相全編』との関係も考察される。

まず、『麻衣相法』には4巻本、5巻本、6巻本があり(三浦[2012]も同じ指摘)、いずれも内容的には大差ないものとし、故宮珍本叢刊(海南出版社、2000年、第424冊)に収められた明・陸位崇校編、唐鯉耀繡梓『新刊校正増積合併麻衣先生人相編』5巻本(光緒壬午(8, 1882)年)を「今本」(以下、本稿では5巻本と呼ぶことにする)として比較対照とするテキストとする。

以下、万暦15年本、『神相全編』の目録が表で明示されていて分かりやすい。

この5巻本では封面が「増積麻衣相法全編」となっていて、序は「麻衣相法全編序」、そして巻1の巻頭の標題は「新刊校正増積合併麻衣先生人相編」となっていることから、もとの書名は「麻衣相法」であり、のちにいくらかの篇を付けくわえて「麻衣相法全編」となり、さらに注釈を加えて「増積麻衣相法全編」となる。そしてさらに他書の内容と校勘、合併して新たに重印したのが「新刊校正増積合併麻衣先生人相編」と考えるのが合理的であろうとする。

しかし鮑栗之が最初に編纂した鮑本『麻衣相法』が存在しないので、だれが「新刊」「校正」「増積」したのかわからないし、また「合併」については、新たな内容を「麻衣先生人相編」に合併したのか、それとも「麻衣先生」と「人相編」を合併したのか、その「人相編」というのは『明史』芸文志に見える「李廷湘 人相編 十二巻」のことなのか、『人相編』が伝わっていないのでわからないとしている。

この『人相編』については三浦[2012]の調査にあるように我が内閣文庫に存在する。次節で触れたい。

興味ぶかい指摘としては、巻5に収められた「相形気色賦」に表題の下に「新增」の二字が刻されていて(三浦[2012]にも「新增」であることの指摘はある)、いつ誰が増したのかは不明であるが、少なくともこの「相形気色賦」は5巻本が編纂されたときに新たに増やされた賦であることを改めて指摘している。

また、この5巻本『麻衣相法』に付されている序は程敏政の「麻衣相法序」ではなく、程敏政の2歳ほど年上で、同じ翰林院出身で彼と親交があった倪岳(1444-1501)の序である。倪岳の序が付さ

れている理由については、(1) 鮑克寛は揚州にいたので、鮑本は揚州か新安で出版されたであろうから、南京出身の倪岳がそれを読んで広めようと思いたち、そこで自分の序をつけて当時の出版拠点であった南京で広く売ろうとしたのではないか。あるいは(2) 倪岳は程敏政とともに翰林院出身の官僚であり、ふたりは交流があったが、弘治 12 (1499) 年、のちに呉中の四才に数えられる唐寅に科挙の試験問題漏洩の嫌疑がかかる事件が起こり、そのときの主考官であった程敏政は牢に繋がれ、出獄後に憤死した。彼の死によって彼の序が付された相書が失伝するのを恐れて、倪岳が自分の序にして刊行したのではないかと推察している。

この倪岳の序については三浦 [2012] にも言及があり、また筆者も別の視点の用意があるので、節を改めてふれたい。

次に、5 巻本『麻衣相法』と、梁 [2016] が最も古いとする 10 巻本『麻衣相法』(万暦 15 (1587) 年、中国国家図書館蔵) との関係が分析される。この万暦 15 年本は三浦 [2012] がすでに言及している『中国古籍善本書目 子部』(上海古籍出版社、1994 年) 著録の「新刻校正増積合併麻衣先生人相編十卷」に相当すると思われる。

問題となるのが、5 巻本は万暦 15 年本を節録したものなのか、それとも万暦 15 年本が 5 巻本を増補したものかという 5 巻本と万暦 15 年本との先後関係である。この問いにたいして梁 [2016] は万暦 15 年本が 5 巻本を増補したものであるとする。理由としては以下の 3 つをあげる。(1) 程敏政が「麻衣相法序」において、『麻衣相法』が「麻衣之書」であり、「他説之有涉於相人者、又取附之」と説明していたことを踏まえると、万暦 15 年本は「麻衣之書」相当部分が 170 篇余り中 6 篇(麻衣金鎖賦、銀匙賦、麻衣相心、麻衣雜論、麻衣秋潭月論女人、神異賦の 6 篇) であり、極めて少なく、「附之」と呼ぶには無理がある、しかも巻 5 から巻 7 に分散していて重要な場所には置かれていないこと。(2) 明初に活躍したとされる相術士、袁忠徹の文章が多く付加されていること(人象賦、袁先生雜論上篇・中篇・下篇、気色相福歌のほか、巻 10 は彼が編輯したとされる古今鑑識となっている)。(3) この万暦 15 年本が孤本であり、他に同様の構成からなる版本がなく、現在流通するほとんどの版本が 5 巻本と同じ構造であること。以上の 3 点の理由から、この 10 巻本の万暦 15 年本は 5 巻本をもと

にして内容を大幅に付けくわえて出版されたものであり、それは『麻衣相法』の多種の版本が出回っていた状況のなか、特色あるテキストとして売り出されたのではないかと推察する。

(1) (2) について、麻衣道者に係る篇の比重が大きいほど鮑本『麻衣相法』に近いという考え方ののだが、これは『麻衣相法』が次第に増補されていった、という考え方が先にあっての説であるように思われる。もちろんその可能性はあるのだが、「附之」は程度の問題ではなかろうか。また重要な場所には置かれていない(不擺在重要的地位) というのは不分明だが、今本でも麻衣道者に係る篇は巻 4 や巻 5 に置かれている。(3) は孤本であることが果たして 5 巻本を増補させた理由となるだろうか。以上、疑問を呈しておく。

そして、この内容を充実させた万暦 15 年本は『神相全編』(全 12 巻、台南・文国書局、2009 年をテキストとしている) につながると考えている。『神相全編』には万暦 15 年本と比較すると、巻首(相説、十観、五法、切相歌、論気色、純陽相法入門第一、鬼谷子相弁微芒第二、林宗相五德配五行第三、唐挙相神氣第四、許負相德器第五) の部分が付加され、一方で『神相全編』には万暦 15 年本にある「古今鑑識」がないという違いはあるものの、その他の内容については順序が異なるだけで、内容はほとんど類似していることから、万暦 15 年本は『神相全編』が完成する過程における一様式、あるいは雛形であると推察する。この点については後述したい。

『麻衣相法』は「麻衣神相」「麻衣相法全編」あるいは「麻衣神相全編」などと書名が曲折して最終的に『神相全編』となったとみなすのが合理的であろう、台北の国家図書館に蔵された最も古い『神相全編』は「明末葉坊刊本」であり、『神相全編』は明末あるいはそれ以前には刊刻されていた、と結論づける。

最後に、冒頭で触れた『金瓶梅』第 29 回に登場する以下の文章を分析する。

西門慶道、「老仙長会那幾家陰陽？道那幾家相法？」神仙道、「貧道粗知十三家子平、善曉麻衣相法、又曉六壬神課。……西門慶聽了、滿心歡喜、便道、「先生、你相我面如何？」神仙道、「請尊容轉正。」西門慶把座兒掇了一掇。神仙相道、「夫相者、有心無相、相逐心生。有相無心、相隨心往。吾觀官人、頭圓項短、定為享福

之人。体健筋強，決是英豪之輩。天庭高聳，一生衣祿無虧。地閣方圓，晚歲榮華定取。此幾椿兒好處。還有幾椿不足之處，貧道不敢說。」西門慶道，「仙長但說無妨。」神仙道，「請官人走兩步看。」西門慶真個走了幾步。神仙道，「你行如擺柳，必主傷妻。若無刑克，必損其身。妻宮克過方好。」（アンダーラインは筆者）

ここで道士は「善く麻衣相法を暁る」と言っているが、以下に続く相術の具体例を『麻衣相法』の万暦15年本、5巻本そして『神相全編』でその有無を確認するのである。

「有心無相，相逐心生，有相無心，相隨心往」は『麻衣相法』では万暦15年本にはなく、5巻本には「達磨祖師相訣」に「若心取相，即是相。無心相隨，心滅耳」という類似した句があるが、『神相全編』にはほぼ同じ句が「十觀」と「純陽相法入門第一」の2箇所に見える。

また「天庭高聳，一生衣祿無虧。地閣方圓，晚歲榮華定取」は万暦15年本と『神相全編』の「驚神賦」に「天庭高聳，少年富貴可期。地閣方肥，晚景風光独占」と類似の句がある¹⁾。

そして（指摘がないのだが恐らく）「你行如擺柳」に相当する句が「石室神異賦」に「身体貴乎厚重，若行如風擺柳葉者，不貧則夭也」とあり，これは『麻衣相法』万暦15年本，5巻本，『神相全編』すべてにある²⁾。

以上から，これらすべてを網羅しているのは『神相全編』のみであり，仙人が言った「麻衣相法」とは『神相全編』のことであった。『金瓶梅』が成立したとされる時期，先行研究に依拠して万暦10（1582）年から万暦30（1602）年，さらに広くみると隆慶2（1568）年から万暦34（1606）年の頃には，すでに万暦15年本にはなく『神相全編』に含まれる内容が流布していた，けれどもそれは「麻衣相法」と呼ばれていたと指摘している。

梁[2016]の見立てをまとめると，『麻衣相法』は成化17年から成化18年（1481-1482）にかけて鮑栗之が編纂した。それは麻衣道者の名が冠された諸篇を中心とするものであった。その鮑本『麻衣相法』に袁忠徹の手になると考えられる篇などを加えて，全体の内容を倍増させたのが万暦15（1587）年本『麻衣相法』であり，それは時をおかずに『神相全編』という名で刊刻されて流布した，ということになる。

3. 『人相編』について

先にも言及したが，梁[2016]によれば中国では散逸していると考えられる『人相編』だが，三浦[2012]がすでに指摘しているように，我らが内閣文庫に『新刊図像人相編』12巻全4冊が伝わっている。各巻首の標題が「新刊図像人相編」となっていて，「麻衣相法」という文字が全く含まれないという三浦[2012]の指摘どおり，本書が『人相編』であることは間違いない。また本書には程敏政の「麻衣相法序」も付されているのも特徴である。稀覯本であると考えられるので，梁[2016]に習って煩を厭わず12巻の目録を提示する。これによって万暦15年本『麻衣相法』は『人相編』とほぼ同じ内容であることがわかる。[]内は双行。

面相図

十三部位総図	流年運氣部位図
十二宮五官図	五星六曜五嶽四澆図
六府三才三停図	九州八卦干支図
四学堂八学堂図	玉枕図
男人面痣図	女人面痣図

卷之一

十三部位総歌	流年運氣部位歌	
運氣口訣	識限歌	十二宮訣 [并詩]
十二宮秘訣	人心通論 [滿庭芳]	五官総論
五嶽	四澆	

卷之二

五星六曜	五星六曜決断	六府三才三停
四学堂	八学堂	人面総論
五行形論神	五行象説	論形
相骨	論声	論氣
相面	相肉	相頭 [并髮]
相眉	面上紋理	相額
相印堂	相耳	相目
相人中	相山根	相鼻
相齒	相口	相唇
	相舌	

卷之三

相髭鬚	相髮	相毛
相魚尾	相項	相背
相腰	相腹	相胸乳

相心	相臍	相下部	相氣色	相色	相憂喜
相身三停	相手	相足	相死生	論四肢	論手
相五露	相五長	相五短	論掌紋	論手背紋	論爪
相五合	相六大	相六小極	論足	論足紋	論臥
相六小貴	五短歌	隱人歌	論食	論黒子	論頭面黒子
学堂詩	五行歌	五行相應歌	形神	骨肉	精神
貴中賤	論形有余	論神有余	論男子貴	論男子賤	論男子凶
論形不足	論神不足	面三停			
五色	五音	五行所生	卷之五		
五臟所出	五行相生歌	五行相剋歌	觀人八法凶像	富貴貧賤孤苦寿夭凶像并詩訣	
五行比和相應	五長	五短	相分七字法	論形俗	相行
五小	六惡	六賤	相坐	相臥	相食
八大	八小	弁美惡二十種	相德	相善	相惡
論枕骨	論額紋	論髮	相疾病	相名標	相容貴賤
論面	論眉	論人中	相窮蹇	相忠信慈孝	相愚癡凶暴
論唇	論舌	論齒	相形帶殺	相十天羅	相十一天羅
論頸項	論背	論胸	相骨節	相面上骨法	相黒子
論乳	論腰肢	面上十大空亡	人像禽獸形		
狐神格例	寡宿格例	劫殺格例	龍形	鱗形	獅形
亡神格例	六害格例	華蓋格例	虎形	象形	犀形
羊刃破家紋例	福德格例	六衝格例	猿形	猴形	龜形
凡人有五行	五音格例	五忌格例	牛形	鼠形	蛇型
四反例	三尖例	六削例	馬形	羊形	鹿形
十二狐神格	十殺格例	富貴口訣	熊形	魚形	猪形
寿相格	天相口訣	窮蹇口訣	狗形	蟹形	猫形
通達口訣	清閑安樂	貪饕	獐形	蝦形	豹形
勞碌格	隱厚格	奸詐	驢形	狐形	鳳形
寬大	聰明俊爽	愚頑慵懶	鶴形	鷹形	燕形
剛強狠癖	惡死卒亡	溺水卒格	鴿形	鸞形	鸚鵡形
火災格	伎巧	刑克	孔雀形	雀形	鳩鴿
克父母	刑克妻妾	妻美	鴛鴦形	鵲形	鷄形
克子息	富格例	大富格例	鴨形	鷓鴣形	鷺鷥形
中富格例	富貴口訣	貴格例	鶻形	雁形	鴉形
大貴格例	中貴格例	小貴格例	鸛形	豺形	猩猩形
寿年口訣	成敗不足格	成	兔形	駱駝形	又論禽獸形
進	退	動	禽獸詩	禽獸目	禽獸目詩
散	福德	論髭鬚			
論斑点			卷之六		
卷之四			婦女相		
鬼谷先生相掌賦	玉掌記	相掌善惡	麻衣道者秋潭月 [論女人相]	鬼谷先生相女人歌	
相所属	相指掌	相骨肉	秋潭月說婦人歌	玉管訣	
相骨	相肉色	相三主	靈台秘訣	女人九惡相	女人九善相
相三才	相三奇	相根基	女人凶相歌	婦人十賤歌	陳希夷洞玄經
相財祿	相心性	相志胆氣	[形有七相]		
			女人論	女人歌	女德論

淫相	産育	妨夫論	黄気歌	赤気歌	青気歌
夫婦相克論	論婦女貴賤論格	女貧孤薄	白気歌	黒気歌	気色論
貧相	気神昏暗論	相嬰兒			
相嬰兒貴賤 [并詩]			卷之十一		
			気色相福歌	九靈歌	歌喜気
卷之七			歌凶気	官員気色歌	凡庶色歌
麻衣先生石室神異賦 [并叙]	金鎖賦		気色生死脈候[并詩]	面凶気色出沒吉凶歌[并青白黒]	
銀匙歌	人倫大統賦 [礼部尚書張行簡撰]		黄紅紫赤]		
			五色定災祥	気色骨肉生死訣	
卷之八			卷之十二		
人象賦 [四明袁忠徹著] 通玄賦 [呉心鑑作] 鬼			神気雜論	神気之子	気神之母
谷先生相賦			色神之父 [青赤白黒黄]	二十四気克応 [并凶]	気
羅先生相賦	人倫淵奥賦	驚神賦	色応候		
何知歌	得意歌	有相人歌	論応克及生死候	訣病生死	気色占応訣
窮相歌	妍媸歌	玉管訣	占五臟安	占五臟病	占死気
貴賤相法	人倫賦鑑	神気章	占父母孝服	占夫婦分離	占婚姻[二首]
体論章	器気章	鬼眼千字文	占妊娠	占妻	占破財
[断云]			占失財	占訟獄	占亨通
			占發達	占加冠進職	占印信
卷之九			占行人	占病及官事	占憂男女
陳希夷風鑑歌	西岳先生相法	唐拳先生切相	占酒食	占捕獲	占失文字
歌			占失火	占水厄	占妻病
太乙真人書	胡僧相訣	歌勇智	占防妻	占兄弟	五星六曜定官
歌孤貴	歌女人	歌妬忌	品		
歌凶暴	歌刑害	歌無子	木星	金星	月孛
歌正声	歌体骨	通仙録	草火将灰	凝脂塗面	晚烟和霧
雜詩秘訣	陳搏先生袖裏金	呂洞賓賦	觀気色	憂色歌	喜色歌
燭胆経	袁先生雜論	巖雷道人神眼	死色歌	哭色歌	吉凶気色 [春
経			夏秋冬]		
唐拳先生玄談神妙訣		十二宮克応訣	金形人	木形人	水形人
照痣訣	面部骨氣訣	総論	火形人	土形人 [已上五形人皆以気色五	
識人賦			口吉凶焉]		
			論十二宮禍福気色秘伝		父母 [看気
			色]		
卷之十			気色説	面部気色	相気色生死之
定九州気色吉凶	論気色	四時気色総判	訣		
論五色吉凶応時生死		又論四時気色	諸部気色歌訣	眼部	口部
弁色歌	面部気色詩	九仙会源気色	十四休廢		
歌					
秋潭先生気色歌	通神鬼眼万金気色篇				
弁気色[并詩]	四時定位	四季気色			
五色所属	六気	気令色草[并			
歌]					
察色歌[六様]	月属気色	四季気色詩			
[五様]					

4. 『人相編』と万暦15年本『麻衣相法』、そして『神相全編』

『人相編』の目録と梁[2016]が表で示してくれた万暦15年本『麻衣相法』の目録とを比べてみる。

万暦15年本『麻衣相法』にあつて『人相編』にないのは、万暦15年本『麻衣相法』巻3の「郭林宗観人有九徳」と巻10の「古今鑑識第一」など。

また逆に『人相編』にあつて万暦15年本『麻衣相法』にないのは、目立つものとしては『人相編』巻1「人心通論」、巻3の「論枕骨」から「論腰肢」までの14篇、「六害格例」から「十殺格例」までの13篇、巻4の「論掌紋」から「精神」までの12篇。

ここまでは「論……」形式の篇が多いか。「論……」形式は、たとえば「論眉」であれば眉とは何かについての解説を中心とした篇。それにたいして「相……」形式は、たとえば「相眉」ならば眉の善し悪しを中心に説いた篇である。ただ明確に区別できない場合もある。

引き続き、巻5「相名標」そして「相窮蹇」から「相黒子」までの9篇、これは「相……」形式である。巻8「鬼谷先生相賦」「羅先生相賦」そして「得意歌」から「玉管訣」までの5篇、「器気章」、巻9「西岳先生相法」そして「歌勇智」から「歌体骨」までの9篇、「雑詩秘訣」「陳搏先生袖裏金」「呂洞賓賦」そして「唐拳先生玄談神妙訣」から「総論」までの5篇。巻8と巻9については相術士の名を冠したものが万暦15年本『麻衣相法』に比べて多く掲載されている。そして巻12の「気色占応訣（以下26条ある「占……」はこの気色占応訣の細目）」と「吉凶気色」から最後の「十四休廢」までの15篇など。

『人相編』が全12巻であるから全10巻の万暦15年本『麻衣相法』より内容が豊富になっているのは当然なのだが、上記で指摘したもの以外は配列順の違いこそあれ、ほとんどが同じである。

その配列の順序について特徴的なことをいくつか指摘しておく。『人相編』巻2の中頃から「相骨」「相肉」など「相……」形式の篇が集中的に収められている。同じ篇が万暦15年本『麻衣相法』では巻1と巻2に収められているのだが、巻2の途中から「隠人歌」「学堂詩」など「相……」形式とは関係のない篇が「亡神格例」まで20篇ほど割り入ったかたちでつづき、それから「論¹⁾髪」「相毛」と戻っている。

また『人相編』は巻2から巻4で「相……」形式と「論……」形式がそれぞれまとまって編纂されているようにみえる。万暦15年本『麻衣相法』は「相……」形式と「論……」形式が混在している。ちなみにこの「相……」形式と「論……」形式をそれぞれまとめて別にした配列は、『神相全編』⁴⁾になると「論面」のつぎに「相面」や「論眉」のつぎ「相眉」など（巻3）「相……」形式と「論……」形式が対になって置かれることになる。

さらには万暦15年本『麻衣相法』の巻8の後半からはじまる「気色相福歌」は袁忠徹が著したものであり、巻9の中ほどの「気色骨肉生死訣」で終わる。巻8の途中からはじめて、巻9の途中で終わりという不格好なかたちである。だが『人相編』では巻11を全部この袁忠徹「気色相福歌」にあてている⁵⁾。

以上からわかるのは『人相編』のほうが万暦15年本『麻衣相法』より整序されているということである。内容がほとんど同じであつて、整理されているものをわざわざ不整理にすることはありえないであろうから、万暦15年本『麻衣相法』を整理し、さらに増補したものが『人相編』なのであろう。増補部分には全ページの上3分の1に挿入されている絵図も含まれる⁶⁾。

というか、梁[2016]が万暦15年本と呼んでいた書の標題はそもそも「新刻校正増積合併麻衣先生人相編」であつた。これは『麻衣相法』ではなく、『(新刻校正増積合併麻衣先生)人相編』と考えたほうがよいのではないか。

さらに『神相全編』との関係をかんがえてみると、大きな違いは『人相編』に付された全頁の絵図が『神相全編』にはないことであるが、基本的に内容は配列順が異なるものの類似している。そして、梁[2016]の指摘によれば万暦15年本には5巻本にはある「相形気色賦」「達磨祖師相法秘訣（相訣秘伝?）」がないのだが、『人相編』にもこの2篇はなく、さらには『神相全編』にもないのであり、『神相全編』が万暦15年本、『人相編』と同系統のテキストである可能性は認められるであろう。

では『神相全編』との類似の程度は万暦15年本と『人相編』ではどうか。本節の冒頭で述べたように万暦15年本にあつて『人相編』にない巻3の「郭林宗観人有九徳」⁷⁾と巻10の「古今鑑識第一」⁸⁾は『神相全編』にもない。また万暦15年本は10巻であるのにたいし、『人相編』と『神相全編』は

ともに12巻で、両書の巻10、巻11、巻12は内容がほぼ同じ、巻6と巻9の内容がほぼごっそり入れ替わっているなど、『神相全編』に近いのは万暦15年本より『人相編』であるように思われる。

ただし、『人相編』があつて、それを『神相全編』が再編集したのかという点、編集の精度からいうと『人相編』のほうが『神相全編』よりも高いように見受けられる部分もあり、両者の先後関係については明言しにくい。たとえば三浦[2012]が指摘するように『人相編』巻2に「論形」「論神」という「形」と「神」に対する総論があり、それを詳説、補足するものとして巻3に「論形有余」「論神有余」「論形不足」「論神不足」が配置されている。これは万暦15年本では巻1に「論形」「論神」「論形有余」「論神有余」「論形不足」「論神不足」の順で配置されていて、より理想的である（この点は先述した『人相編』のほうが万暦15年本より整序されているという指摘と外れてしまうのだが）。けれども『神相全編』では巻1に詳論である「論形有余」「論神有余」「論形不足」「論神不足」が先に来て、総論である「論形」「論神」が巻2に置かれている。構成上おかしい。

また『麻衣相法』の根幹となっていたと思われる「麻衣先生石室神異賦」「金鎖賦」「銀匙歌」の3篇は、万暦15年本、『人相編』では1つの巻にまとめられている（それぞれ巻5と巻7）のに対し、『神相全編』では巻5に「神異賦」、巻6に「金鎖賦」「銀匙歌」に別れておかれている。しかも「神異賦」のあとに「巖電道人神眼経」と「呂純陽相賦」が入っているので、「神異賦」と「金鎖賦」「銀匙歌」がセットであることがわかりにくい構成になっている。

5. 倪岳序について

さて、5巻本『麻衣相法』には程敏政の序はなく、倪岳の序が付されている。先述したように、梁[2016]はその理由を、倪岳が自分の序をつけて広く売ろうとした、あるいは交流のあった程敏政が重視した相書が失伝するのを防ぐために自分の序をつけたと推察している。それにたいし三浦[2012]は5巻本『麻衣相法』にある倪岳の序文は中段が140文字削除されていること、一方『神相全編』には倪岳序のフルバージョンがあり、その倪岳序フルバージョンには鮑栗之が編纂したことも書かれていることを指摘している。そのうえ

で、鮑栗之の編纂経緯が削除された倪岳の序が付された5巻本『麻衣相法』は、編纂した人物が鮑栗之ではない別人であったのであり、倪岳序は書肆が『麻衣相法』を権威づけるために冠しただけであり、本書を倪岳序は関係ないと指摘している（梁[2016]も倪岳の文集に本序が収録されていないことから偽作の可能性もあるが、とりあえずは倪岳の序として考える、としている）。そして本来は程敏政、倪岳の2つの序が載った『麻衣相法』があったはずだとする。

もちろん、倪岳序は書肆が権威づけのためにつけたという可能性はあるのだが、そうであれば倪岳序そのものの由来はどうなるのか。

ここで倪岳序のフルバージョンテキストを提示しておく。5巻本『麻衣相法』に付されたショートバージョンと比べると文字の異同があるからである。フルテキストは蓬左文庫蔵の『神相全編』9巻、巻首1巻を底本とする⁹⁾。校勘には中国哲学書電子化計画所収の写真本（『増積麻衣相法全編』同治癸酉（1873）年の5巻本を使用した。なお【】内が省略されている箇所である。

相人之術古矣。孔孟觀人之法著於語孟者，豈其^①權輿與。然以人之吉凶寿夭貴富貧賤尽繫於相者非也。以吉凶寿夭貴富貧賤不繫於相者亦非也。相有定理，而相之者不能以尽窮也，以不能尽窮之見而苟同如此者吉，如此者凶^②，如此者寿夭貴富貧賤也。豈能皆中哉。【故有相逐心生之說。使非讀書窮理之至，安能察人之心如聖賢也。近世所伝相人之書皆宗麻衣道者。然人出己見，各有不同。至於即五行之象，以定一身之形，因已往之迹，以為方来之驗則同。要之其說固有可取者，不必尽出麻衣也。同守淮陽東兗鮑君栗之，政事之暇留意其書，首著麻衣之說。復会諸說之宗，麻衣者類輯成編，將以授之，專其術，使伝前世。】夫^③相外也，心内也。故聖賢言心，不言相。若曰凶人凶^④其吉，吉人吉^⑤其凶。相烏足知之哉。然則是書学者不可以不知也，不可以尽非也，不可以深泥也。

賜進士出身翰林院学士經筵講官兼修国史錢塘^⑥
倪岳書

〈校勘〉

①其：5巻本は「作」に作る。

②如此者凶：5巻本はこの4字なし。

③夫：5巻本は「究之」に作る。

④凶：5巻本は「言」に作る。

⑤吉：5巻本は「言」に作る。

⑥国史錢塘：5巻本はこの4字なし。

たしかに「同守淮陽東兗鮑君栗之，政事之暇留意其書，首著麻衣之說。復會諸說之宗，麻衣者類輯成編，將以授之，專其術，使伝前世」と鮑栗之が麻衣道者の説を明らかにし，諸説を集めて編纂した経緯が書かれている。

ただ，ここで興味ぶかいのは，省略された箇所
の冒頭に「故有相逐心生之説」とあることである。人の相は心のありようによって生成変化するという「相逐心生説」は『宋史』芸文志に著録される相書『玉管照神局』，あるいは元の呉処厚の随筆『青箱雜記』などにも見え，中国の相術においてよく言われる言説である^[10]。さきの『金瓶梅』第29回でも道士がこの説を述べていた。「だから相逐心生説があるのだ」という句がカットされているということは，このショートバージョンの序を付した『麻衣相法』には相逐心生説が含まれていなかったからではないか。

実際に，『神相全編』において相逐心生説が説かれているのは，巻首・十観，巻1・純陽相法入門第一，巻4・麻衣相心，巻8・陳希夷風鑑歌の4箇所であるが，これらはいずれも5巻本『麻衣相法』には含まれていない。換言すれば5巻本『麻衣相法』は相逐心生説を説いていないということになる。一方，『人相編』には巻9に陳希夷風鑑歌が収められているので，『人相編』は相逐心生説を説いていることになる。

また省略された部分は，つづけて「近世所伝相人之書皆宗麻衣道者。然人出己見，各有不同。至於即五行之象，以定一身之形，因已往之迹，以為方来之驗則同。要之其説固有可取者，不必尽出麻衣也。」と述べる。最近の相書はいずれも麻衣道者を祖としているが，占う人々はそれぞれ自身の見方にしたがっており，バラバラである。ただし，五行の象徴^[11]によって身体の形を分類して，過去のパターンから未来の兆候とするという点については同じである。つまりこうした五行による分類という説は人々がもともと採用していたのであって，すべてが麻衣道者から出ているというわけではない，と。この内容は麻衣道者による相法をアピールするどころか，逆にくさす文句として伝わるだろう。したがって，該当部分がカットされたのは，三浦 [2012] がいうように，編者が異なるからという可能性もありつつも，つまりは

『麻衣相法』の序文としてそぐわないから削除したのではないだろうか。

そうすると，倪岳序は現行の『人相編』か『神相全編』の内容のものに対して付されていたことになる。ただし，『人相編』の特徴は何と言っても全ページに挿入されている絵図であって，それについて何も言及していないのはやや不自然でもある（絵図については程敏政序も言及していない）。そうすると，倪岳序は『神相全編』に最もふさわしい序となる。もしそうであるとすれば，相逐心生説をカットした倪岳序を付した5巻本『麻衣相法』は『神相全編』が成ったあとの成書となる。

梁 [2016] が指摘しているように，倪岳が序文に見える翰林院学士経筵講官であった成化年間（1465-1487）には『神相全編』ができていて，5巻本『麻衣相法』の刊刻は『神相全編』に遅れる可能性を提起しておきたい。

謝辞

本研究は大妻女子大学戦略的個人研究費（課題番号 S1918）の助成を受けたものです。

注

[1]「石室神異賦」に「地閣方圓，晚歳栄華（『神相全編』は枯に作る）定取」と同じ句があり，こちらを取るべきであろう。

[2]ただし『金瓶梅』の原文は「你行如擺柳，必主傷妻。若無刑克，必損其身。妻宮克過方好」であって，「不貧則夭也」という内容はなく，ただ歩き方が，柳が風にゆれるようにゆらゆらと歩く，という点のみの一致である。

[3]前後の関係からみれば，恐らく「相髮」であろう。

[4]テキストは12巻本，台湾・大孚書局，1986年の活字本を使用した。

[5]巻11の標題に袁忠徹の名前が入っていることから袁忠徹が著したことがわかるのだが，『神相全編』巻11にも収められた「気色相福歌」は袁忠徹のものであることが明記されなくなる。それは『神相全編』そのものが「袁忠徹訂正」として袁忠徹の著作にされたからであろう。

[6]上段に絵，下段に文章という形式は万曆刊の坊刻本『万宝全書』などによく見られるものであるという指摘が三浦 [2012] にある。

[7]『神相全編』巻1に類似する「林宗相五徳配五

行第三」があることにはある。

[8]この「古今鑑識」は、『明史』芸文志に著録された「袁忠徹 古今鑑識 八卷」であろうから、本来は8巻あったわけで、「古今鑑識第一」とあるのは不明。

[9]台湾・大孚書局の活字本には序文はない。また蓬左文庫蔵『神相全編』は9巻本であり、12巻本では10巻以降は「気色（身体に現れ出る色）」に関わる篇がまとまっている。つまり『神相全編』にはこうした「気色」を省略した系統のテキストも存在することがわかる。

[10]佐藤実。心のありようによって変わる人相について。大妻比較文化。2016, 17, pp.19-33.

[11]原文「五行之象」は後周・王朴『太清神鑑』巻4・論声に「人之稟五行之形，其声亦有五行之象。

故木音高暢，火音焦烈，金音和潤，水音圓急，土音沈厚」とある。また『神相全編』巻2・論声に「夫人稟五行之形則氣声亦配五行之象也。故土声深厚，木声高唱，火声焦烈，水声緩急，金声和潤」，5巻本『麻衣相法』に巻1・論声「夫人稟五行之形則声氣亦其五行之象也。故土声深厚，木声高唱，火声焦烈，水声緩急，金声和潤」などとある。

参考文献

[1]梁偉賢。《麻衣相法》版本初探。漢学研究。2016, 34(4), pp.131-164.

[2]三浦國雄。術数書の基礎的文獻学的研究—主要術数文獻解題 第三篇。平成21年度～平成23年度科学研究費補助金（基盤研究（C））研究成果報告書。2012.

（受付日：2021年7月12日，受理日：2021年9月2日）

佐藤 実（さとう みのる）

現職：大妻女子大学比較文化学部

関西大学大学院文学研究科博士課程後期課程修了。
専門は中国思想史。

主な著書：劉智の自然学（単著，汲古書院）